

# 日蓮聖人初期の唱題観

上 田 本 昌

一、

法華經の題目を唱え、他にも唱えさせるということは、日蓮聖人の生涯を通じての願目であった。聖人が理想とした生仏一如、娑婆即寂光の世界に到達する為には、先ず「唱題」から入らなくてはならないと説いたことは、紛れもない事実であった。この場合の唱題とは、文字通りに法華經の題目を一心に唱えることである。口に唱えるのみでなく、意に唱え身に唱えることにより、理想の実現があるとしたのである。故に宗門でも「お題目総弘通」が叫ばれ、「唱題」に関する諸行事が展開されている。

古来、唱題については先師により、その意義や功德について、法華經や遺文の上から、幾多論究されてきているところであるが、専ら開目・本尊の兩抄を中心とした唱題による成仏論に集中し、結論的な究明に傾くものが圧倒的であったといえる。勿論、唱題成仏論は教学の樞紐であり、最も重要な問題であるから、そこに論究が集中するのは当然といべきである。だが、問題は唱題による成仏の論にのみ意を注ぎ、そこに至るまでの段階的究明が、ともすると忘れられがちなところにあるといえる。即ち、「題目を唱えることが現代においてなぜ必要なのか」という問に対し、「それは唱題によって成仏できるからである」と直に結論を持ち出し、「だからお題目総弘通」であり、「唱題

行」でなくてはならないのだと短兵急に考えて、すべてこと足れりとする点にあるといえる。

日蓮聖人が、「唱題による成仏」という結論にたどり着くまでには、相当の究明と準備を必要としたわけである。六十一年の生涯において、その半数の三十二歳までは、仏教のみではなく広く儒・外にまで及ぶ究明と準備の時代をすごしてきたのであった。更にそれは後半の人生、即ち鎌倉・佐渡・身延の時代にまで引き継がれて行ったことを考へると、容易ならざるものがあつたといえよう。

「唱題成仏」という結論を振りかざすことは簡単であるが、端に結論のみを持って運動を進めるばかりではなく、「唱題による成仏」に至るまでの、聖人の究明の跡を素直にたどってみる必要が、特に現代にとっては不可欠の要諦であるといえよう。即ち、「なぜ唱題なのか」という原点に立ち帰って、「唱題」の本来の意義を、出発点から考察することが基本でなくてはならないといえる。

要するに開目・本尊の両抄により、聖人の題目観は完成すると考え、その完成された題目観のみを考えて、そこに至るまでの過程を軽視するとしたら、信行上からも、布教上からも、かえってその題目観を真に解することは不可能となろう。何に事によらず結論を理解する為には、そこに至るまでのプロセスを知らなくては、結論の真の理解は得られないのと同様である。

末法の世に「仏使」として、題目を弘めるべき使命を持って出世した日蓮聖人の門下が、「題目を弘めるべき使命」を持った法師（僧）として生きて行くには、但信無解の在俗と同一の立場で、結論だけしか取りあげないといった態度であってはならないであろう。

法華経所説の「法師」は、衆生の教化が使命であることは、既に論究した通りであるが、聖人の唱題観について、

これより完成に至るまでの初期の過程の一端を考察してみようとするものである。

二、

そこで、聖人初期の題目観から逐次道を進るとしたら、先ず『唱法華題目鈔』と、『法華題目鈔』の二鈔をあげなくてはならないであろう。それ以前にも『一生成仏鈔』や『守護国家論』等に妙法華経の最勝たること、眞実開頭の經典であり、妙法を唱えることにより「一生成仏更に疑あるべからず」といった表記はあるものの本格的な唱題観は、文応元年五月二十八日に鎌倉の名越で述作された『唱法華題目鈔』をもって最初とすべきであろう。

この御書は現在、『唱題鈔』とも称され眞蹟は伝わっていないが、古来眞蹟現存の御書と同様にみられており、『南条兵衛七郎殿御書』の眞蹟第二紙・第三紙の行間に、日興の筆による本鈔の抄写が見られるので、<sup>(3)</sup> 当時は眞蹟が存在していたことがわかる。述作は「文応元年<sup>大藏</sup>五月二十八日 於鎌倉名越書畢」と末文にあるので、『立正安國論』とほぼ時を同じくしての述作といえる。

この御書では念仏の信者との問答形式十五番を重ね、法華経の題目を唱えることの功德を明らかにしている。第一問では、

「世間之道俗させる法華経の文義を弁へずとも、一部・一卷・四要品・自我偈・一句等を受持し、或は自もよみかき、若は人をしてよみかかせ、或は我とよみかかざれども（乃至）終に法華経を得心るものと成て、十方浄土にも往生し、又於<sup>ササ</sup>此土<sup>ニ</sup>即身成仏する事有べきや。」<sup>(4)</sup>

と質問している。これに対し「かりそめにも法華経を信じて聊も謗を生ぜざらん人は、余の惡にひかれて惡道に墮<sup>ツ</sup>べ

しとおぼえず。」と答え、大通智勝仏の十六王子の例をあげている。ここではまだ「法華經の文義」というとらえ方で、一部一巻一句の書写や読誦、と他人にもそれを勧めることが示されていて、まだ「唱題」に關しては述べられていない。専ら「法華經に信をとり候べき」ことを強調して問答が重ねられている。即ち難解な法華より、易行の念仏の方が勝れているのではないかという聖道・淨土の二門について、

「念仏の法門はなにと義理を知らざれども、弥陀、名号を奉<sup>レ</sup>唱、淨土に往生する由を申<sup>ス</sup>は、遙に法華經よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞え侍れ。」<sup>(5)</sup>

と信行の難易度をあげている。これに対して、

① 退大取小の者といって法華經を捨てて權教に移った場合は、後には惡道に墮ちる。

② 法華經を誹謗してこれを捨てた者は、たとえ義理を知るような者であっても謗法の人である。

③ 末代の我等が法華經の一偈一句を聞いて隨喜の念を持ったならば、まさしく五十展転・一念隨喜の者に相當する。

④ 若しも謗法の者となれば、いかに念仏を申すとも往生は不定のものとなる、としている。

聖人によれば、法華經を疎略に心得える者を謗法とし、「謗法と申すは違背の義也。」と解して、仏に違背した者が如何に念仏を唱えてみても、成仏得道はありえないとの考えを主張されている。その理由として、

「問云、只題目計を唱る功徳如何。答云、釈迦如来、法華經をとかんとおぼしめして世に出でましまししかども、

四十余年の程は法華經の御名を秘しおぼしめして、御年三十の比より七十余に至まで法華經の方便をまうけ、七十二にして始て題目を呼出させ給へば、諸經の題目に是を比ぶべからず。其上、法華經の肝心たる方便・壽量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。」<sup>(6)</sup>

と述べてこれより法華經の題目と諸經の題目との相異を明確にしている。即ち、

① 仏は成道以来七十余歳に至るまで、諸經を説かれたが、法華經の題目は秘して未顯であつた。これは教・機・時共にいまだその段階に至らなかつた為であつた。

② 仏が七十二歳に至って始めて法華經の題目を顯し、眞実を示されるに至つたのである。

③ 従つて諸經の題目と法華經の題目とは、根本的に比較にはならない程、法華經の題目の方が優れているのである。

④ 其の上更に、一切衆生の皆成仏道の法門たる方便品と壽量品の肝心である「一念三千」と「久遠実成」の二大法門は、「妙法」の題目の二字のみにおさまっているのであるから、諸經の題目とは全く違つた内容を持つた題目であるとするのである。

此の点については天台が『法華玄義』の中で題目五字の説明をしているので周知の如くであるが、第一巻で五字の大意を述べ、第二巻から七巻までに渡り、広く「妙」の一字について語り、八巻九巻では「法華經」の三字について解釈し、十巻では「經」の一字について記している。特に「妙」の一字については最も重要視し、巻を重ねてあらゆる角度から「妙」の解説を行っている。

本来、「妙」とは仏の悟りの境界を表しているのであるから、「不可思議境」であり、「絶言の境地」であつて、簡単に文字や言葉で説明のつくものではないが、敢て末輩の為に解説を試みているのである。「不立文字」の境を文字で表すことは容易な事ではない。この意味から『玄義』が、敢てその難事をなしとげた意義は大きなものがあるといえる。天台にしてよくなしとげた行蹟と稱すべきであろう。尚、たとえ初期の御書とはいえ、「法華經の肝心たる方便・壽量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。」という説は、後の開・本兩抄はもとより聖人

晩年の教学にも主流をなしていたことが知られよう。

三、

さて、本鈔では「止観十巻の心は一念三千・百界千如・三千世間・心仏衆生三無差別と立給」と『止観』に及び、妙法の題目と他の經典の題目との相違を一層明白にしている。それによると、

①一切の諸仏・菩薩・十界の因果・十方の草木瓦礫等は妙法の二字にあらざと云う事はないとして、法界のすべては妙法であるとし、諸経の題目の如く単に一経の題名としての意義しか持たぬものとは根本的に異っていることを示している。

②また華嚴・阿含等の四十余年間の諸経には実大乘の功德は収まっていないとし、小乗は勿論、權大乘の経々の題目には実大乘の功德は含まれていないことを明らかにしている。

③大乘の中でも「往生」を説く経の題目には、他土への往生を説くのみであって、即身成仏の功德は含まれていない。

④例えてみると諸大乘経の題目は、小乗経の題目に比較して王であるかもしれないが、「王中の王」ではない。

こうして諸経の題目と、法華経の題目との相違をあげ、その勝劣を判じているのである。本来、「題目」とは經典の「題名」であり「名目」のことである。故に「題目」というがここで明らかにならず、法華経の題目は単なる一經典名のみの意味ではなく、「妙法蓮華経」の中には上述の如き諸の功德が含蔵されていることを示しているのである。此の点については、他の御書の中でも、しばしば述べられている。

更に本鈔では、諸經の題目を説いた仏についても、仏は皆平等であるという意味をもって他仏も自仏も、みな同じであると言ひ、或いは法身平等の理を立て、どの仏も皆同じであるという立場を一般にとっているが、実は經が違ふように仏も又一仏毎に異り、「一仏に一切仏の功德をおさめず。」<sup>(8)</sup>とし諸經では一仏一經毎の存在であるとしている。それに対して、

「今法華經は四十余年の諸經を一經に収めて、十方世界の三身円満の諸仏をあつめて、釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる故に、一仏一切仏にして妙法の二字に諸仏皆取れり。故に妙法蓮華經の五字を唱る功德莫大也。諸仏諸經の題目は法華經の所開也妙法は能開也、としりて法華經の題目を唱べし。」<sup>(9)</sup>

と述べて、法華經の題目の功德が、諸經典の題目よりも所説の仏・能説の法共に遙かに優れていることを明確にしている。即ち法華經の題目の中の「妙法」の二字に、一切の法と仏との功德を収めていることをあげ、優劣の歴然たることを論じているのである。

題目  
諸經—所開—一仏非一切仏—一經題名—王

法華經—能開—一仏即一切仏—含藏一切功德—王中の王

本鈔は佐前も極めて初期の述作であるため、ともすると佐後の諸御書とは、全く異った所説の如くに考えられ、輕視されがちであるが、たとえ佐前の初期であっても、聖人の法華經を所依とする信仰の基本は、確乎たるものがあり、唱題を唯一の所行とされていたことには変りはない。例えば法華經を信行する者のあり方を問うたのに対し、

「常の所行は題目を南無妙法蓮華經と唱べし。たへたらん人は一偈一句をも可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>誦。」<sup>(10)</sup>

と明確に唱題を「常の所行」として決定している。これは佐前・佐後を一貫した聖人の信行上における態度であり、

些の相異もない点である。しかし、本鈔は入信間もない対告衆への著作であるので、説示の上にも、相当の配慮がなされていることも看過してはならないであらう。即ち、

「愚者多き世となれば一念三千の観を先とせず。其志あらん人は必ず習学して可<sub>レ</sub>観<sub>レ</sub>之<sub>」</sub>

とある如く、末法の世は専ら唱題すべきであり、更にその上「其志あらん人は必ず習学して」一念三千を観すべきであるというのである。この点は一見たしかに、佐後の唱題観とは差がある如くであるが、ここでいう「習学」とは、『開目抄』の最初に、一切衆生の「習学すべき物三あり。」<sup>(1)</sup>といわれている「習学」と同様の意味であらう。愚者は唱題だが、智者は唱題よりも一念三千を観ぜよといっているのではない。あくまで唱題であるが、その上更に分に依じての「習学」なのである。愚者と智者に分けて、「常の所行」を説いているかの如くであるが、「其志あらん人」とは分に依じて所行を進める人のことである。つまり助行として示されたものといえる。『開目抄』でも習学すべき儒・外・内の三は、一切衆生の分に依じての習学である。

即ち、あくまで信行の基本・正行は、「題目の南無妙法蓮華経と唱べし。」であり、機に従って説・誦・解説・書写等の助行を用い、自行・化他に亘る信心を増益せしめることにあるのである。身延での代表著作たる『撰時抄』には冒頭に、

「夫<sub>レ</sub>仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし。」<sup>(2)</sup>

とある。仏法を「学ぶ」には必ず時を「ならう」ことが大事であるとし、即ち習学すべきことをあげているのである。この「習学」もやはり機に従っての習学である。『唱法華題目鈔』にしても、『開目抄』や『撰時抄』にしても、共に一檀信徒個人に宛た消息文ではない。著作であり広く門下の僧俗に与えられたものといえる。従って「機」によ



り唱題正行の他に、適宜誦・誦等の助行を修すべきことが示され、特に二陣三陣と聖人の後を継承する行者にとつては、「仏法を学び」「時をならう」ことも「必ず」実践すべきことであり、時に分に応じては「一念三千の觀」も唱題を通して、正觀成就することができるものといえる。更に『下山御消息』によると、「仏法を修行する法は必ず経々の大小・権実・頭密を弁べき上、よくよく時を知り、機を鑑て申べき事也。」<sup>(19)</sup>とあり、機に依つて弘通を弁えなくては、「身心を苦しめて修行すれども驗なき事なり。」ともいつている。これは明らかに機根によつて、分に應じた修行や弘通があることを示しているといえよう。

しかし如何なる場合であっても、唱題の正行が前提となつていふことは言をまたないのである。正行を修した上で更に「志あらん人」は即ち分に應じての助行を修すべきである。『報恩抄』で、

「日本乃至漢土月支一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱べし。<sup>(14)</sup>」  
と有智無智をえらばず一同に唱題を勸奨されているのは、あくまで正行の唱題が基本の信行であることを示されたものであつて、『唱題鈔』の「常の所行は題目の南無妙法蓮華經と唱べし。」といわれているのと大きな差があるわけではない。

従来、ともすると左前を序分、佐後を正宗分とに区分し、画一的に又は機械的に祖書を二分して、左前の祖書は序分であるため、正宗分には及ばないかの如くに考えられているが、これはあまりにも序正二分説に拘つた見方であるといえる。勿論、そうした説に該当する祖書もあるであろうが、左前なるが故に、すべてを一括して序分ときめつける扱い方には無理がある。左前の中にも正宗分あり、佐後の中にも序分と同様の記述があることを認めるとき、機械的な分類は、聖人の教義を真に理解していく上で、妨げになる場合もあることを知らなくてはならないであらう。

一抄の中でも、例えば本尊に関する説示では、未だ三秘を明確にされていない正宗分末頭の部分もあるが、その点だけをとって、一抄を区分扱理することは、好ましいこととはいえない。特に『唱題鈔』は、前述の如く『立正安国論』とはあい前後して著作された「姉妹篇」であるともいわれている。とりわけ「常の所行は唱題を」とすめられている点は、正宗分中の祖書と同一の立場であるといえよう。佐後の祖書と大きな相違があるとは考えられない。この点に関しては、身延入山後の聖人を流通分として扱うことがあるが、これも同様に、すべて身延時代の祖書を流通分であるとし、正宗分は佐渡在島中に終わっているかの如くに考えるのも、これ又拘った見方というべきであろう。むしろ正宗分の帰結は、身延時代の祖書の中にあるともいえる。

因みに『唱題鈔』では最後に、次のような注目すべき一文をもって、一鈔を締めくくっている。

「唯仏の遺言の如く、一向に権経を弘めて実経をつみに不<sub>レ</sub>弘<sub>レ</sub>人師は、権経に宿習ありて実経に不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>者は、或は魔にたばらかされて通を現ずるか。但法門をもて邪正をただすべし。利根と通力とはよるべからず。<sup>15)</sup>」

とある。これは唐土の人師の中に通力を現して人々に徳をほどこした例をあげているのに対しての答弁である。例えば善無畏三蔵の如く、実経に依らず権経に付いて通力を現ずるのは、「魔にたばらかされて」の所業であるとし、利根や通力に迷わされることなく、あくまで法門の正邪に依って選択を誤らないように心掛けることが肝心であると説いている。

この「利根と通力とはよるべからず。」という文と、「但法門をもて邪正をただすべし。」の文は、唱題信行していく上で、特に重要な祖文というべきであろう。現今の門下はこの文を再確認すべきであるといえる。

#### 四、

次に『法華題目鈔』であるが、前の『唱題鈔』より六年後の文永三年正月六日に清澄寺で著作されたもので、聖人四十五歳の時に筆をとっている。「根本大師門人日蓮撰」と自署されているので、外相承の立場で述べられたことがわかるが、法華經の題目について、その意義と功德をあげ、唱題を勧めている点では、佐後の祖書と大きな隔たりがあるわけではないことは、前の『唱題鈔』の時と同様である。ただ「根本大師門人日蓮」という署名に拘って、あくまで天台沙門としての著述であるとし、唱題勸奨に関する記述まで、軽視することは行過ぎであろう。

即ち、此の鈔は最初に大意を述べ、唱題の功德が如何に大であるかを明示している。

「問云、法華經の意をもしらず、義理をもちはずして、只南無妙法蓮華經と計五字七字に限って一日に一遍、一月乃至一年十年一期生の間に只一遍など唱ても、輕重の惡に引れずして四惡趣におもむかず、ついに不退の位にいたるべしや。答云、しかるべき也。」<sup>(16)</sup>

この第一問答が一鈔の趣旨を如実に表しているといえる。たった一遍の唱題であっても、意義のすこぶる深いことがわかる。前述の如く聖人の宗教は、先ず「唱題」することから始まるわけである。

逆説すると、如何に「智解」が秀れていても、「通力」が巧みであっても、唱題を實行しない者は、惡趣を離れることも、不退の位に至ることも不可能なのである。聖人にとって、「題目を唱える」ということは、直に法華經を「信ずること」に結び付くのであって、「唱即信」を意味しているといえる。「法華經の題目は八万聖教の肝心一切諸仏の眼目なり。」<sup>(17)</sup>であるから、「唱題すること」の一行の中に、八万聖教を唱え、一切の諸仏の功德を集中すること

になるのである。これが「唱題信心」の功德であるが、

「正直捨方便の法華経には以信得入」と云、雙林最後の涅槃経には是菩提因雖復無量若説信心則已撰尽等云云。夫仏道に入る根本は信をもて本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初也。たとひさとりなければ信心あらん者は鈍根も正見の者也。たとひさとりあれども信心なき者は誹謗闍提の者也。」<sup>(18)</sup>

とある如く、爰では専ら「信」の重要性が強調されている。当然のことながら信心なくしては、仏道に入ることはできないのだが、ここで言う「信」又は「信心」とは、題目を唱えることを指しているのである。故に「さればさせる解なくとも、南無妙法蓮華経と唱るならば悪道をまぬかるべし。」とあり、題目を日輪と雷に例え、我等を蓮華と芭蕉に例えて、「かくをもひて常に南無妙法蓮華経と唱させ給べし。」と唱題を勧めている。即ち「唱題即信心」であり、「信心即唱題」ということになるのであって、「以信得入」はまた「唱題を以て入ることを得る」と同様の意味を持つものといえるであらう。

従って、聖人にとっては「仏道に入る根本は唱題をもつて本とする」のであり、たとえさとりはなくとも唱題の者は鈍根も正見の者である。逆に智解はあつても唱題なき者は誹謗闍提の者ということになるのである。「かくをもひて常に唱題せよ」とは、唱題することが信心であつて、その信心は仏道に入る根本であると思ひ、常に唱題を怠らぬようにせよという意趣であると受けとめられるのである。

さて、この「唱題」の「唱」の意味を、更に掘り下げてみることにしよう。先ず一般的な解釈からすると、「唱」とは、

①となへる。②いひはじめ。歌ひはじめ。先んじて行ふ。導く。③うたふ。④よばはる。よぶ。⑤うた。詩

詞。歌曲。③或は緇・韻・倡・昌に作る。<sup>(19)</sup>」

という意味があることがわかる。この中では「となへる」が最もよく知られてをり、続いて「うたふ」であろう。「口」に「昌」が加わってできたことから考えても、口を開けて音声を発し、「となえ・うたう」ことである。つまり「口唱」であるが、この音声を発することに、実は大きな意義があるのである。「よばはる・よぶ」という意味がある如く、相手に声を出して「呼、・呼びかける」ことである。

一般的な例から考えても、人と人が行き会った時、先ず声をかけて相手を呼びとめ、互いに意志の通じ合いが、そこから始るわけである。相手の名をよび合うこと、これが第一歩であることからして、宗教の世界でも人が神仏或いはその教法に対して呼びかけることから始まるといえる。千里の道も一歩から始る如く、宗教の道もこの呼びかけの第一歩から出発するのであって、呼びかけの一步なくしては、二歩も三歩も、ましてや千里の目的に到達はできない。

したがって、この第一歩の肝心である呼びかけること、即ち唱題が第一に不可欠の意義を持つことになるであろう。故に如何なる宗教であっても、神仏や法に対する呼びかけを一切しないという宗教はない。むしろ宗教はすべてこの呼びかけの行為から始まっているといつてよいであろう。一般世間でも、先ず人と人との関係は挨拶から始ると同様に、声を出して信仰する対象に呼びかけることが大切であり、そこからすべての信仰生活が始るのである。聖人が「口に唱えること」を厳しく教えられているのもその為であるといえる。「故に一度妙法蓮華經と唱れば、一切の仏、一切の法、一切の菩薩、一切の声聞、一切の梵王（乃至）一切衆生の心中の仏性を、唯一音に喚顯し奉る功德無量無辺也。」<sup>(20)</sup>というのも、「よぶ」「よばれる」の意といえよう。

神力品では仏が、無量百千万億の一切の衆の前に於て、「出広長舌、上至梵世」を現している。広長舌を出すとは世尊が音声を発して衆生に呼びかけられ語りかけられているのである。故に又衆生は、「彼諸衆生、聞虚空中、声已合掌向、娑婆世界、作如是言、南無釈迦牟尼仏、南無釈迦牟尼仏。」と今度は仏に向つてその名を唱え、呼びかけて礼を尽し帰依しているのである。

次に「唱」には「いひはじめ。歌ひはじめ。」という意味がある。まだ誰れも唱えていないのに、自分がまづ先に唱え始めることで、これには時に勇氣のいることであり、困難がつきまとうこともあるであろう。何に事によらず人々に先駆けて提唱し、創唱し始唱することは、それなりの覚悟が必要となるものである。一人先頭を切つて始唱すると、必ず後に続いて合唱し斉唱する者が出てくるものである。故に最初の唱え始め、いい始めの人は唱導者として尊重されることになる。

涌出品では周知の如く、本化の大菩薩が涌出し、この「始唱」の役を、仏滅後の末の世で担当することになっている。

「是菩薩衆中、有四導師、一名上行、二名無辺行、三名淨行、四名安立行、是四菩薩、於其衆中、最為上首、唱導之師。」<sup>(21)</sup>

つまり上行等の四大菩薩は、「最為上首」であり、「唱導之師」であるという。この「唱導師」は、末法の世に仏に代つて法華經の題目を唱え始め、正法たることを「いひはじめ」のである。聖人を「末法唱導師」と称するのことに由来している。

## 五、

かくして「唱」にはもう一つ最も大事な意味がある。それは「先んじて行ふ。導く。」という内容を持っていることである。既に明白な如く、単に口で唱えるということだけではなく、始めて唱えつつ他の者を誘い導く意味を持っているわけであるが、その上更に「先んじて行ふ」ことの意味があるというのである。これは勿論、他に先駆けて唱え実践して行くことであるが、それには前述の如く、決意が必要である。人の先頭に立って導く為には、覚悟がなくてはならない。

聖人は「不自惜身命」の決意であり、「我不愛身命」の覚悟で、唱導の師を勤められたのである。聖人に従って唱題を実践し、又その流れを汲んで、唱題を弘めようとする者、即ち門下にとつては、聖人と共に唱題する心構えが必要となるであろう。「唱え導く師」が法華経でいう「法師」であり、広い意味における「日蓮門下」ということになるであろう。

これを要するに、唱題とは口で題目を唱えると同時に、率先して行い、導くことにあるといえる。自他共に唱題によつて導かれて行くことになる。「先んじて行ふ」とは、人より先に唱える「唱導」の意味もあるが、「行ふ」とは「口唱」から「意唱」へ、更に「意唱」から「身唱」へと進行していくことを意味するものといえよう。いうまでもなく「こころ」で唱え、「身」で唱えるとは「行ふ」ことであり、実践を意味するのである。つまり身・口・意の三業に唱えることが「受持」である。身業に唱えるとは「色読」することであつて、聖人が常に体験されたところである。聖人は「一心欲見仏、不自惜身命」の唱題を貫き通したのであつた。まさに題目の口唱から始めて、意唱・身唱

へと進まれた「三業唱題」であったといえる。色心二法共に唱題することが肝心なのである。これを「先んじて行ふ。導く。」という「唱」の意味するところと、全く共通するものといえる。

「一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声もをしましらず<sup>(23)</sup>唱るなり。」

という場合の唱題は、勿論口唱の意味であるが、「始唱」され「首唱」されて、「唱導」されたことを同時に意味するものである。「声もをしましらず」とは「高唱」され、「一同に」に「唱和」すべきことを勧められているのである。

『法華題目鈔』では、この唱題の証文として、陀羅尼品の「受持法華名者、福不可量」の文と、正法華經總持品の「若聞此經宣持名号徳不可量」及び添品法華經の陀羅尼品「受持法華名者福不可量」等の經文をあげて、唱題の福德が不可量であることを示している<sup>(24)</sup>。その上で更に「広・略・要の中には題目は要の内なり。」として、「要の題目」の中に仏法一切の功徳を納めていることを「譬ば如意宝珠の一切の財を納め、虚空の万象を含めるが如し。」と論じている。

「妙楽云、但名<sup>ナ</sup>大<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>妙<sup>ト</sup>者、一有<sup>ニ</sup>心易<sup>シ</sup>治<sup>ル</sup>無<sup>シ</sup>難<sup>シ</sup>治<sup>ル</sup>、難<sup>シ</sup>治<sup>ル</sup>能<sup>ク</sup>治<sup>ル</sup>所以<sup>ニ</sup>稱<sup>ス</sup>妙<sup>ト</sup>等云云。此等の文の心は大方広仏華嚴經・大集經・大般若經・大涅槃經等は題目に大の字のみありて妙の字なし。但生者を治して死せる者をは治せず。法華經は死せる者をも治す。故に妙と云ふ積也。されば諸經にしては仏になるべき者も仏にならず。法華は仏になりがたき者すら尚仏になりぬ<sup>(24)</sup>。」

また諸經には「大」の文字の付いた題目は、例にあげた如く数多くあるが、いずれも「妙」の文字は付いていない。「妙」の文字が付いているのは妙法蓮華經のみであるとし、難治を能く治するが故に「妙」と稱するのであって、妙



法の題目の功德、特に「妙」の徳について語っている。

かくして「能化所化俱無歴劫妙法経力即身成仏」<sup>(25)</sup>の仏果を得る為の唱題が強調されている。即ち、末法の衆生は法華経を信じ、余念なく唱題の一行を修すべきであり、能所俱に無歴劫にして、題目の功德により、即身成仏を得るとするのである。唱題という最もやりやすい行の中に、最も到達したい仏果を得ることができると言うことは、末法の衆生にとって、これ以上の簡素化された行は他にないことになる。『法華題目鈔』は上述の如く、天台沙門の流れを継承した型をとっての著述となっているもの、内容はこうして唱題に関する最も基本的な論究を実施し、唱題の重要性を始めとして、その功德や意義を探究しているのである。

此の基本的な論究にもとづいて、聖人はこれ以後、諸御書の中で唱題成仏に関する究明を進展させているのである。即ち、初期とはいえ、唱題に関する最も重要な『唱法華題目鈔』と『法華題目鈔』の両鈔から、聖人の本格的な「唱題」に関する所信と態度が、基本付けられていることになるのであって、我等は先ず此の両鈔から「唱題とは何か」の根本を習った上で、唱題修行を出發させることが肝要であるといえる。

最後に唱題を尊重することは大事なことであるが、そのあまり唱題の形式にこだわって、威儀を調えることのみになり過ぎたり、音声の抑揚・緩急等を厳しく規するが如きは、本来の唱題から遠いものというべきである。末法の衆生は、散心にして、四威儀に固執せず、行住坐臥を選ばず<sup>(26)</sup>、「自然に」唱うべきものであって、一念随喜・五十展転の者が、極めて自然に唱えることが本来の姿でなくてはならないであろう。自然に唱題することにより、仏果もまた「自然に讓与」<sup>(27)</sup>され、「自然に意に当る」<sup>(28)</sup>こととなろう。この自然讓与や自然當意が、即ち自然益身・即身成仏へつながって行くことになると考えられるのである。

「させる解なくとも、南無妙法蓮華經と唱るならば悪道をまぬかるべし。」という場合の「させる解」とは、勿論「学解」や「理解」をさしていることであろうが、更にはむずかしい行軌を必要としないことも含めていることは、「只南無妙法蓮華經と計り」と言い、「只南無妙法蓮華經と題目計り唱」ともと表していることで首肯できよう。この「ただ」というのは、唱えることの他は一切、むずかしい理解や儀式を要しないことの意味であるといえよう。即ち、「だれにでも」また「いつでも」そして「どこでも」できる唱題でなくてはならないのである。

末法の下根下機、濁世の衆生にとつては、「ただひたすらに」唱題が肝要であつて、むずかしい威儀や特定の場所を必ずしも要しないのである。「若於園中、若於林中、若於樹下、若於僧坊、若白衣舍、若在殿堂、若山谷曠野、（乃至）即是道場」であつて、極めて自然な態度、日常の生活に即した中での唱題であり、「ただ」唱えること自体に上述の如き大きな意義があるといえる。但しこの場合であつても、考察の如く「機に応じ」又は「分に応じて」の唱題、即ち何万遍以上唱えなくてはならないとかいう数量や、或いは威儀を調べての唱題は、一向に差しつかえるものではないが、基本は数量や形式にこだわることなく、各自の分に応じて自然に唱えていくことにあるといえよう。

六、

科学万能・経済至上が叫ばれている現代にあつて、これからの地球・人類を真に救うものは、宗教以外にないのではないか、ともいわれている。その宗教の中でも仏教は、一切衆生の成仏を目標としている。或る特定の民族・国土のみの俾せを願う宗教と異り、すべての人々、あらゆる国土の平安を願目としている。

しかも法華經は諸宗教・諸經典の一切を開会して、皆仏道に入らしむる道を広く説示しているのである。法華經の

題目は、排他ではなく、あくまで「開会」であって、仏知見を開示悟入せしめる役目、機能を持っている。今こそ地球上の全人類が、対立・排他ではなく、互いに法華經の題目に含藏されている開会の法門により、互いに理解し合い助け合つて、地球を護持し、破壊・地獄への道を塞ぐことに協力し合うべきときであるといえよう。謗法・闢提の者多く、仏道に縁なき衆生の溢れている現今、これら永不成仏の徒を救済する為には、如何に「縁なき衆生」を「縁ありしめるか」にある。下種結縁の題目を唱えつつ、自他共に救済される方法としての唱題は、これからの世間で大いに注目され尊重されていかななくてはならない。地球上で絶え間なく繰り返えされている紛争は、中東湾岸で見られる如く、主として一神教の信徒らである。彼らは異宗教を排除することが目的であり、その為には如何なる殺戮を実施してもかえりみないという主義である。元来、イスラム教・ユダヤ教・キリスト教等の一神教は他宗教との共存にはそぐわぬものを本質的に持っている。ましてや法華經のような「開会」の思想は見られないのではないか。

仏教の中でも最も大事な開会・開顯の法門を持った法華經こそ、これからの世界を救う宗教として、唯一のものといえよう。世界のあらゆる国民の仏知見を開き、仏道に悟入せしめる題目の一大合唱が湧き起る時、眞の平和と娑婆即寂光の大果が得られることとなろう。その為にも、聖人初期の唱題観を根元に戻って、知ることが必要であるといえる。そこから眞の唱題が始まることになろう。今や世界はソ連のベレストロイカによって代表されている如く、新しい道を求めている。現代の日本を、そして世界を救い導く為の宗教たり得るべく、唱題宗の存在意義は極めて大きいものがあるといわなくてはならない。教学も布教も、すべて爰に目的があるといえよう。

日蓮聖人初期の唱題観（上田）

〔註〕

- (1) 「法華經に現われた法師と化人」（本誌第六十二号）を参照されたい。  
 (2) 一生成仏鈔 定遺 四四頁  
 (3) 『日蓮聖人真蹟集成』第四卷六七・六八頁  
 (4) 唱法華題目鈔 定遺 一八四頁  
 (5) 同 一八六頁  
 (6) 同 二〇二頁  
 (7) 同 二〇三頁  
 (8) 同 二〇三頁  
 (9) 同 二〇三頁  
 (10) 同 二〇二頁  
 (11) 閉目抄 同 五三五頁  
 (12) 撰時抄 同 一〇〇三頁  
 (13) 下山御消息 同 一三三頁  
 (14) 報恩抄 同 一二四八頁  
 (15) 唱法華題目鈔 同 二〇八頁  
 (16) 法華題目鈔 同 三九一頁  
 (17) 同 同 三九二頁  
 (18) 同 同 三九二頁  
 (19) 『大漢和辭典』（諸橋轍次著）二一〇四四頁  
 (20) 法華初心成仏鈔 定遺 一四三二頁  
 (21) 涌出品 大正蔵 九一四〇（上）  
 (22) 報恩抄 定遺 一二四八頁  
 (23) 法華題目鈔 同 三九四頁

(24)	法華題目鈔	定造	四〇二頁
(25)	同	同	四〇四頁
(26)	同	同	二〇二頁
(27)	本尊抄	同	七一一頁
(28)	四信五品鈔	同	一二九八頁
(29)	神力品	大正蔵	九一五二(上)